

77) 中大脳動脈閉塞症における臨床像の検討

多田 光宏・上野 一義 (国立療養所)
宝金 清博・井原 博 (北海道第一病院)

過去約3年間に入院した脳梗塞患者のうち中大脳動脈に閉塞が証明された55例につき、その臨床像を検討した。

〈結果〉 1. 閉塞部位と臨床像の間には有意の関係を認めない。 2. 側副血行の悪いもの程、突発型発症が多く、初診時症状が重く、最終予後が悪い。 3. 血栓症に比し塞栓症は側副血行が悪く予後が悪い。 4. 側副血行とCT上の脳梗塞の範囲 Relative Infarction Sizeは相関する。 5. 進行性卒中では側副血行のFairが多く、Goodが少ない。 6. 階段状増悪型進行性卒中は塞栓症に多く、予後が悪い。 7. 緩徐連続増悪型進行性卒中は血栓症に多く予後が良い。

〈結論〉 中大脳動脈閉塞症の臨床像は側副血行と密接な関連性がある。

78) 中大脳動脈閉塞症の神経放射線学的検討

宝金 清博・上野 一義 (国立療養所)
多田 光宏・井原 博 (北海道第一病院)
脳神経外科

〔目的及び対象〕 中大脳動脈閉塞症における血管閉塞部位と側副血行路の良否と、この結果生ずる脳梗塞のCT上の範囲の関連を明らかにするため、脳血管撮影により中大脳動脈閉塞が確認された54例の脳梗塞例を検討した。

〔結果及び結論〕 脳血管撮影上、基幹部閉塞は、穿通枝の前後により3つに分類し、二次分枝閉塞は上行枝と下行枝の2つに分け、皮質枝閉塞は単数の閉塞と複数の閉塞に分けたこの分類にもとずき、側副血行路の良否を評価することにより、CT上の梗塞の範囲と脳血管撮影がよく相関することが判った。

79) 椎骨脳底動脈閉塞症にて再開通をみた2例

嶋崎 光哲・武田利兵衛
井出 渉・川合 裕
佐藤 純人・小笠原俊一 (中村記念病院)
藤原 秀俊・戸島 雅彦 (脳神経外科)
佐々木雄彦・鎌田 一
田中 靖通・中村 順一

脳梗塞における脳血管写上の再開通現象についてはよく知られている事実であるが、椎骨脳底動脈閉塞症例の再開通については文献的にも稀である。我々は、最近、臨床症状、脳血管写にて脳底動脈閉塞症と早期診断され、抗凝固療法、線溶療法施行後、脳血管写にて早期に再開

通が確認され、症状も著明に改善した2例を経験した。脳底動脈閉塞症病変の解除を脳血管写で確認した報告は少なく、また、これらの症状より、虚血症状を呈しながらも、なお可逆性を有する脳に対する血流再開は時に機能回復をきたしうる。さらに、これらの事実は急性期天幕下虚血病変に対する治療を考える上で極めて重要と考え、若干の文献的考察を加え報告する。

80) めまいを主訴とした Subclavian Steal Syndrome 4症例

原田 淳・遠藤 俊郎 (富山医科薬科大)
岩井 良成・高久 晃 (脳外科)
西嶋美知春 (社会保険)
高岡病院脳外科
神山 和世 (齊藤記念病院)
脳外科

我々は、これまで7例の Subclavian Steal Syndrome を経験しているが、うち4例は、めまいを主訴としていた。4例の内訳は、男3例、女1例、平均年齢63歳であった。Subclavian Steal Syndrome 病変は、左3例、右1例であった。4例とも脳血管写上 Subclavian Steal Syndrome 病変の対側椎骨動脈に、閉塞狭窄、屈曲等の血管病変を合併していた。一方めまいを示さなかった3例には、椎骨動脈病変を認めなかった。4例中、1例に axillo-axillary bypass 手術及び vertebral artery transposition を、1例に axillo-axillary bypass 手術のみを施行した。手術例のうち前者を紹介し、めまいを主訴とした4例の脳血管写上の特徴について報告した。

81) 小脳梗塞の17例の検討

川田 佳克・佐古 和廣 (旭川医科大学)
橋爪 明・大神正一郎 (脳神経外科)
米増 祐吉
鈴木 望・程塚 明 (大西病院)
脳神経外科

CT上 low density を認め、脳幹部梗塞を伴わない小脳梗塞17例を検討し、その臨床的特徴に関して検討した。

発症時の平均年齢は64歳で男女比は12:5。CTより推定し、上小脳動脈領域が6例、前下小脳動脈1例、後下小脳動脈領域が10例であった。CTでは mass effect が9例、水頭症が2例に認められ、また出血性梗塞が4例に認められた。

この出血性梗塞の頻度はテント上の梗塞と比べて高いと考えられた。原因として、小脳梗塞は塞栓によるもの